

幼 兒 の 心 理 的 發 達 (十)

東京家政大學教授 山下 俊 郎

六、六歳兒の心理的發達(つづき)

(3) 情緒的發達

一體に六歳兒はすべての精神生活において、五歳兒にくらべて均衡を失つて居り、不安定な状態にあるといわれる。五歳兒のころにはすでに一應の頂點に達し、一應の落ちつきを得ていた子どもたちは六歳になると新しい精神發達のあゆみをはじめるので、均衡と安定とがくずれて來るとされてゐる。

このことが最もはつきりと現われるのが情緒的生活であるといつていいであらう。すなわち、情緒の分化と發達とはまきに五歳兒のところまで述べたように五歳までのあいだに一應の完成のすがたをそなえて來ている。おとなの生活に現われて來るようないろ／＼の情緒がすでにひととおりの分化して來

ているからである。ところが六歳になると子どもは情緒的に不安定な状態になり、興奮的になり、落ちつきを失つて來るのである。このことを一つ々々の情緒について少し述べて見よう。

まず泣くことから觀察して見る。幼兒は五歳にはすでにあまり泣かなくなつていた。ところが六歳になると子供はまた泣きやすくなる。二歳ごろに見られたようなかんしゃくを起すことも時として起つて來る。一體に六歳兒は泣き虫なのである。めそ／＼したり、ワア／＼泣くこともある。ちよつとけがしてもすぐに泣きやすい傾向が強くなつてゐる。

泣くというのは情緒の現われである。六歳兒がこのように泣き虫であるとすれば、この現われのもとになる情緒にもそれだけの變化があるはずである。そこでこのことをもう少し考へて見る必要があるとなつて來る。

恐れのようにすを見ると五歳兒はすでに四歳までに見られた幼兒らしい恐れを一應卒業してゐた。ところが六歳になると

恐れはまた強くなつて來ることが見受けられる。ことに聽覺的な恐れ、例えばサイレンの音のようなものに對する恐れが非常に強くなつてゐる。また、とくに想像力の發達にともなつていままではそれ程の意味を持たなかつたようなものが恐がられるようになつて來てゐる。幽霊や魔女、妖精というようなものを恐がつたり、ものかげに誰かゝるのではないかというようなことを恐がるようになる。その他大きい犬や野獸深い森林、小さい昆虫、雷、雨、火事などいゝものゝものが恐がられるようになつてゐる。死に對する恐れやけがに血を出すことに對する恐れは五歳以下の子どもには見られなかつたくらい強くなつてゐるのが見られる。

怒りの情緒を見ても六歳兒はまたはげしさを見せてゐる。三歳ごろまでに見られたようなはげしいかんしやくは五歳ごろにはすでに一應の落ちつきを見せて來てゐるのである。ところが六歳すぎると子どもは非常にはげしく怒るようになる。非常に攻撃的になり、言葉でも身體でもまわりの人に對してはげしくつかかるようになつてゐる。いわゆるかんしやくを起して、床の上にひつくり返つたり、人をけつたり、打つたり、口ぎたなくひとをのしつたり、ものをこわしたり、動物や虫や小さい子供をいじめたりするというようなこともしばしば見られるようになつてゐる。ほかの子どもを持ち物に對してしつとするとしようなこともしばしば見られるのである。

愛情においては、六歳兒は自分の家族、ことに母親、父親

さらにきょうだいに對する愛情をすでに豊かに持つてゐる。笑いにおいては六歳兒になるといゝの豊かな世界が開けはじめたと見られる。ユーモアの世界にも子どもたちの心はそろ／＼開けかけてゐると考えられる。

六歳兒の情緒的發達を見ると、五歳兒に見られた安定がくずれてゐる所に大きい特徴が認められるのであるが、この不安定を落ちつけて行く過程をなだらかにしてやることが幼兒の相手をするもののためであらう。

(4) 社會的發達

社會的發達においても情緒的發達の所で述べたのと同じようなことがいえる。すなわち、五歳兒は社會生活の中に自分というものの獨立を身につけてゐる點においても、ひとと一緒にになり協同して生活するという面においても、すでに一應の段階に達してゐたのである。

この發達の傾向は六歳兒になつても大體同じようであるといつていいであらう。社會的發達、ことに子ども同志の社會生活の發達の第二段の展開は八歳ないし九歳ごろからが本格的に行なわれるのであつて、その前期の年齢では少しずつのあまりめだたない變化があるだけであるからである。このことは例えば子どもたちの作るグループの大きさについても言える。グループの大きさというのは社會生活の發達を見るのに最も單純な手つとり早い一つの手がかりである。五歳兒の所で幼兒の作るグループはせい／＼二人から五人ぐらいの大

きさであると言へたのであるが、六歳児においても、子どもたちの作る自然發生的なグループはやはり五—六人程度のグループが普通なのである。

ただ、その社會生活の分化の度は、少しずつすすんで行くであろう。たとえば友達というものに對して、大體において幼児の生活に現われている友だちはその結びつきの程度からいうと非常に淺い一時的のものである。すなわち遊びや遊具をなかだちとして作られるその場、そのとき限りのお友達であることが多い。五歳児の所で子供たちがお友達と遊ぶことを心から好むようになることを述べたのであるが、この傾向は六歳児になると一層強くなつて來るのである。六歳児は友だちを持つということに非常な興味を持つてゐるのである。このことはおともだちという言葉が子どもたちの口から實によく出て來るといふことにも現われている。そしてこの年齢の子どもたちはちよつと見るとおともだちと仲よく遊ぶことが出来るように見える。しかしそう長續きがしないのであるそれはやはりほんとの社會生活というものが身についていないからであつて、よくけんかする。しかもそのけんかは大抵は物のうばい合いから起ることが多い。六歳児の社會生活はまだ／＼ほんとの協調生活に入つていないのである。

まず、全體的に考へて六歳児の社會的生活は五歳児と本質的にはいぢるしい差異が認められないと言つていいであらう。少しずつの漸進的發達は認められるのではあるが。

こゝでいまままでふれなかつた幼児の道德的な發達について

少し述べて置きたい。道德的發達において大切なことは、善いことと悪いことがどの程度に理解されてゐるかということである。幼児はいいことはまわりの大人ことに兩親がしてもいいということであり、悪いことというのは大人がしていけないことであると考えてゐる。この考え方をピアジェは道德的實念論レトリクスと名づけた。實念論というのは考へたことと客觀的に實在することとを混同する考え方であつて、幼児的な考え方の代表的なものである。したがつて道德的實念論というのは、道德といふものが人間の外の世界に實體として存在してゐるといふ考え方なのであつて、いいことわるいことといふのはこれがちやんと人間とは別なものであるとして存在してゐると考へる。この別に存在してゐるものはすなわち大人がいいと言ひ、わるいといふものなのである。だから幼児はつねに大人がいいといふことがいいことであり、わるいといふことが悪いことであると考えてゐる。このことは周圍の大人が子どもの行動の上にと興える批判によつて善惡を判斷するといふことを示してゐる。したがつて何かの形において常に子どもの行いに對する批判を興えることが何よりも大切な道德性を養ふ道であり、方法である。この意味において絕對に叱らないといふような方法は道德性を高める方法では決してあり得ないのである。このような道德性の發達傾向は三四歳ごろから六歳に成るまで大體同一の傾向をたどつてゐるといつていいものである。(三二頁下段)

